神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 4 号

梶 山 遺 跡 (3)

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 4

KAJIYAMA (3)

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Naka-ku Yokohama, Japan
1 9 7 0

訂　　正

ページ	行	誤	正
7	第 3 図説明文	溝状遺構 2	溝状遺構Ⅱ
9	第 6 図 〃	溝状遺構 1・2	溝状遺構Ⅰ・Ⅱ
12	第 7 図 〃	P3, R7－13 号住居址	P3, P7－13 号住居址
15	第 9 図 〃	溝状遺構 1	溝状遺構Ⅰ
20	第 13 図 〃	2 区暗褐色土層	Ⅱ区暗褐色土層
20	〃 〃	3 区暗褐色土層	Ⅲ区暗褐色土層
20	〃 〃	溝状遺構 2 出土	溝状遺構Ⅱ出土
図版 4・	上	8 号住居址埋甕	~~8 号住居址埋甕~~
図版 6・	上	1 号 9 住居址	~~9 号住居址~~

序

当館では考古部門の展示の基礎をなす地域研究ならびに資料収集の一環として，遺跡の発掘調査を行なっております。

梶山遺跡の調査はその一部で，昭和42年度から43年度にかけて，３回実施し，縄文・弥生・古墳の３時代に属する各種の遺構や遺物を明らかにできました。

これらの調査結果は，昭和43年に開催した梶山遺跡展や，神奈川県立博物館発掘調査報告書１および２により一部ご紹介しました。

第３次調査については，資料数がきわめて多く，整理と検討に非常な日数を要したため発表が多少遅れましたが，このほど一応その結果がまとまりましたので，ここに報告書を刊行いたします。

梶山遺跡は規模が大きく，まだ一部を明らかにできたにすぎず，調査未了の遺構も残っておりますが，第３次調査をもってひとまづ区切りをつけ，いままでに得られた資料を今後さらに研究のうえ，改めて再調査を実施し，完全を期していきたいと考えております。

刊行にあたり，調査ならびに資料整理について格別のご協力を賜わった地主小林幸雄氏，明治大学考古学研究室，金子浩昌氏，野谷由美氏，大学生ならびに高校生の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 45 年 3 月

神奈川県立博物館

館　長　斎　藤　太次郎

目　　次

1　梶山遺跡第3次調査について……1
2　調査の概要……2
3　Ⅰ区の遺構と遺物……5
(1)表土および暗褐色土層　(2)8・11・12号住居址
(3)溝状遺構Ⅱ　(4)10号住居址　(5)20号住居址
4　Ⅱ区の遺構と遺物……11
(1)表土および暗褐色土層　(2)9・13・18号住居址
(3)14・19号住居址
5　Ⅲ区・Ⅵ区の遺構と遺物……14
(1)表土および暗褐色土層　(2)溝状遺構Ⅰ
(3)15・16号住居址　(4)17号住居址
6　結　　び……17

〔付〕　梶山貝塚出土の自然遺物（梶山貝塚発掘調査報告補足）……21

挿図・図版目次

第1図　調査区平面図……3
第2図　8号・11号・12号住居址実測図……6
第3図　12号住居址平面実測図……7
第4図　8号住居址出土土器……7
第5図　14号・19号住居址実測図……9
第6図　10号住居址・溝状遺構Ⅰ・Ⅱ（部分）実測図……9
第7図　9号・13号・18号住居址実測図……12
第8図　17号住居址実測図……15
第9図　15・16住居址・溝状遺構Ⅰ（部分）実測図……15
第10図　17号住居址出土土器……16
第11図　石器・土製品・鉄器実測図……18
第12図　土器実測図……19
第13図　土錘実測図……20

図版1　遺跡付近地形図
図版2　1 遺跡遠景　2 発掘状況
図版3　1 8号住居址　2 8・11・12号住居址重複状態
図版4　1 8号住居址埋甕　2 8号住居址埋甕および貯蔵穴
図版5　1 12号住居址埋甕　2 12号住居址埋甕埋設状態
図版6　1 9号住居址　2 13・18号住居址　3 9・13・18号住居址重複状態
図版7　1 17号住居址　2 17号住居址鉢形土器出土状態
3 15・16号住居址　4 溝状遺構Ⅰ
図版8　1 鉢形土器（G18）　2 鉢形土器（17号住居址）
3 器台（20号住居址）　4 器台（20号住居址）
図版9　梶山貝塚出土自然遺物

1. 梶山遺跡第3次調査について

梶山遺跡――横浜市鶴見区上末吉町梶山所在――については，地域研究の一環として，昭和42年8月，梶山台地東南端に存在する集落址を対象に第1次調査を，次いで同年12月，東南斜面に形成された小貝塚（梶山貝塚）を対象に第2次調査を実施した。

これらの調査では，既に神奈川県立博物館発掘調査報告書1～2号に報告したとおり，良好な結果が得られたのであるが，第1次調査のさい日程の関係で発掘を保留した個所があり，また第2次調査に関連して，花積下層期の集落址を把握する必要が生じてきた。

第3次調査は，以上2点につき前調査を補足する目的で実施し，花積下層期の集落址は発見できなかったが，未調査部分に関してはある程度目的を達したので，ここに概要を報告する。

なお本報告書では，梶山遺跡第2次（梶山貝塚）調査の自然遺物中，整理と同定に手間どったため報告できなかった獣・魚類について補足した。

これらについては作業が著るしく遅延していたのであるが，金子浩昌・野谷由美両氏からご援助を賜わったことにより，ようやく種別が明らかにできたのである。そのさい，野谷氏から種別表とともに概要に関するレポートを頂いた。そこで，同氏のご了解を得て，そのまま掲載させて頂くことにした。

両氏から寄せられたご援助とご好意に対して，厚く感謝する次第である。

調 査 関 係 者

調査主催者・神奈川県立博物館館長　村田良策

発掘担当者・神奈川県立博物館学芸員　神沢勇一

調査参加者・川口徳治朗，佐藤斉，平本紀美男，今井厚子，阿部澄子，梅川紀子，広田花代子（神奈川県立博物館）

井上裕弘，松尾宣方，川崎和夫，奥山睦義，小野正敏，磯部久生，内田俊秀，村山昇，清水茂，鈴木由美，八木橋久美子，土屋ひろみ，大塚真弘，矢島国男，金子豊貴男（明治大学）

宇野友子（鶴沼女子高校）

調査期日・昭和43年8月1日～12日

報告書執筆・神沢勇一

2. 調 査 の 概 要

遺跡の立地，環境および現状については第1次調査報告に述べたので，重複をさけ，本報告では補足的に遺跡付近の地形図を掲載するにとどめる（図版1）。

第3次調査は，第1次調査における未調査遺構の発掘と花積下層期の集落址探索を目的とする関係で，台地上面のⅠ区（A～H・8～13），Ⅱ区（A～H・14～22）およびⅢ区（A～H・1～7）に対して行ない，のちに溝状遺構Ⅰを追跡する必要上，西南側に調査区域を拡張し（A～U・0～－3），A～H・－3～0にⅥ区を設定した。なお，Ⅵ区以外にも発掘区の増設を計画したが，栽培中の畑にかかるため，一応前述の範囲に限定した。発掘区は第1図に示すとおりで，面積は延225m^2である。同図の網目部分は第1次および第2次調査の発掘個所であるが，今回再発掘した個所は除外している。

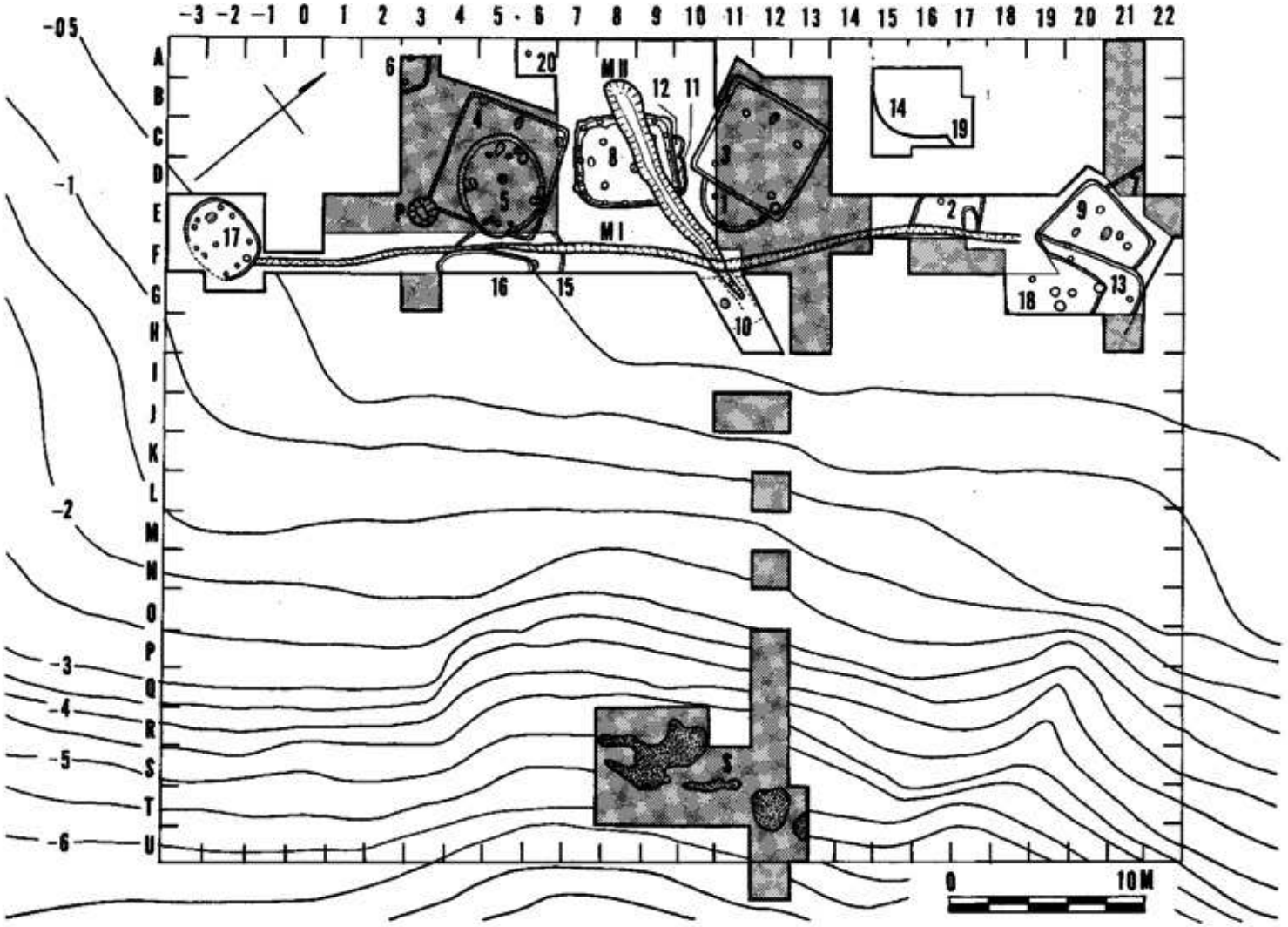
発掘作業は，Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅵ区とⅡ区とに分け，大体並行して進めた。

Ⅰ区では，溝状遺構Ⅱの断面に現われた8号住居の発掘，溝状遺構ⅠおよびⅡの規模を把握するため，Ⅲ区の一部を含めて，A6，A～E・7～10，G～H・10～12の範囲を調査し，8号住居址を完掘，溝状遺構Ⅱについては西側末端を明らかにできた。なお以上の過程で，新たに10号，11号，12号および20号住居址の存在が知られた。

このうち，8号，11号および12号住居址は加曽利EⅡ期のもので，重複しており，先後関係は8号→11号→12号の順序である。溝状遺構Ⅱはこれら3個の住居址を斜めに切っている。そのため，保存状態が良くない11号，12号住居址は，8号住居址の北東壁付近に，床面と壁の一部が認められるにすぎないが，8号住居址だけは原形をかなり良く保っていた。

溝状遺構Ⅱは，第1次調査の所見から，東西方向にかなり延びると予想されたのであるが，西側はB8で終わっていた。東側では，G～H・11～12に土師器の小破片（型式不明）を伴う10号住居址により破壊され，またこの付近では地山の傾斜に伴い暗褐色土層が厚く堆積し，G12で同土層中に没入するため末端を確認できなかった。本遺構西端を調査中，A8～A7にかけて，断続的な床面が存在した。これが20号住居址であるが，ほとんど隣接する住宅の下になっているので，調査を中止した。時期は前野町期である。

溝状遺構ⅠはⅠ区F7～F11の発掘所見から，さらに西南に向かって，直線的に延びると考えられた。そこでⅢ区～Ⅵ区にかけて，F6～F－3まで発掘区を延長した結果，台地先端の斜面にかかるF－1まで存在し，さらに続くと思われたが，弥生町期の17号住居址に切られて



第1図　調査区平面図　1～20＝住居址番号　M＝溝状遺構　S＝貝塚

おり，末端を確認できなかった。

これに伴い，17号住居址を調査することになり，E－1～－3・G－1～－2を発掘した。またⅢ区では，溝状遺構Ⅰが，重複した15号住居址と16号住居址を切っていることが知られた。前者はおそらく勝坂期，後者は加曽利EⅠ期の住居址である。日程の関係で粗雑な調査になることを避け，今回は発掘を見合わせた。

次にⅡ区については，E18～20付近から東南側に広がる黒褐色土の落込部分を中心に，E～G・18～21，E20およびF21を発掘した。残部調査の目的以外に，第1次調査のさいE18～20付近に花積下層式土器の破片が多く，住居址の存在する疑いも考えられたためである。

この地点では，前に床面と壁の一部が確かめられた7号住居址の下から，9号，13号および18号住居址が，僅かずつ南へずれて重複しており，ほかにG18，F18付近には前野町期の床面（張床）らしい個所も存在したが，攪乱が著るしく，確認するに至らなかった。

時期は9号住居址が五領期，13号住居址が弥生町期である。9号住居址と7号住居址は同時期に属するが，7号の重複部分は張床であるので，9号が古い。18号住居址については，床面直上の覆土中から，花積下層式土器と勝坂式土器とが出土している。量的には後者の方が多いが，いずれの時期に所属するか，断定しがたい。なお，13号および18号住居址は地境にかかり排土の置場がなく，日程の面でも完掘不可能なため，存在を確認するにとどめた。

Ⅱ区では，このほか位置的に疑問はあったが，表土に花積下層式土器の破片がやや目立って散布するA～C・15～17を念のため試掘した結果，表土下に直接関係ある遺構，遺物は発見されず，宮の台期の14号住居址と弥生町期の19号住居址が重複していただけであった。

各区の層序，遺物の出土状態その他は，新設したⅥ区をも含めて，第1次調査のさいの所見とほぼ同様である。層序は，第1層＝表土（耕作土），第2層＝有機物を含む暗褐色土層，第3層＝ローム質の黄褐色土層，第4層＝関東ローム層となっている。第2層の暗褐色土層は表土および遺構覆土と本質的には同一であるが，遺構覆土の状態では，硬さ，色調および有機物の含有が増すので，暗褐色土または黒褐色土の名称をもって区別した。

遺物は表土，暗褐色土層，遺構覆土（暗褐色土または黒褐色土），住居址床面から出土し，一般に暗褐色土層，遺構覆土中に多く，量はリンゴ箱5個をみたす程度である。土器破片が大部分で，第1次調査で出土した以外の型式はみられなかった。主要な出土遺物には，9号住居址出土の鏃と考えられる鉄製品破片と鉄鏃茎部破片各1，Ⅱ区暗褐色土層出土の扁平片刃石斧1等がある。

また，遺構および付属施設では，8号住居址の埋甕と貯蔵穴，12号住居址の埋甕がある。

3. Ⅰ区の遺構と遺物

(1) 表土および暗褐色土層

今回の発掘区は第1次調査の発掘区と一部重複するが，新たに発掘した部分においても，以前の所見と異なる点はなかった。

層序は表土（耕作土）が30cm前後で，暗褐色土層へ漸移的に移行する。8号住居址付近の平坦部では，暗褐色土層20～30cm，ローム質の黄褐色土層15～20cm，関東ローム層の順序で堆積しているが，暗褐色土層は台地縁辺に向かって，地山の傾斜に従い，次第に厚くなりG12付近では40～50cmとなる。

遺物はおもにA～E・7～10付近から出土した。土器破片が大部分を占め，花横下層，勝坂，阿玉台，加曽利EⅠ，加曽利EⅡ，加曽利EⅢ，宮の台，弥生町，前野町および五領の諸型式が認められた。加曽利EⅡ式土器が最も多く，特に8号，11号および12号住居址周辺に集中しまた前野町式土器と五領式土器とが20号住居址の部分に目立った以外は，ごく散漫に出土した。

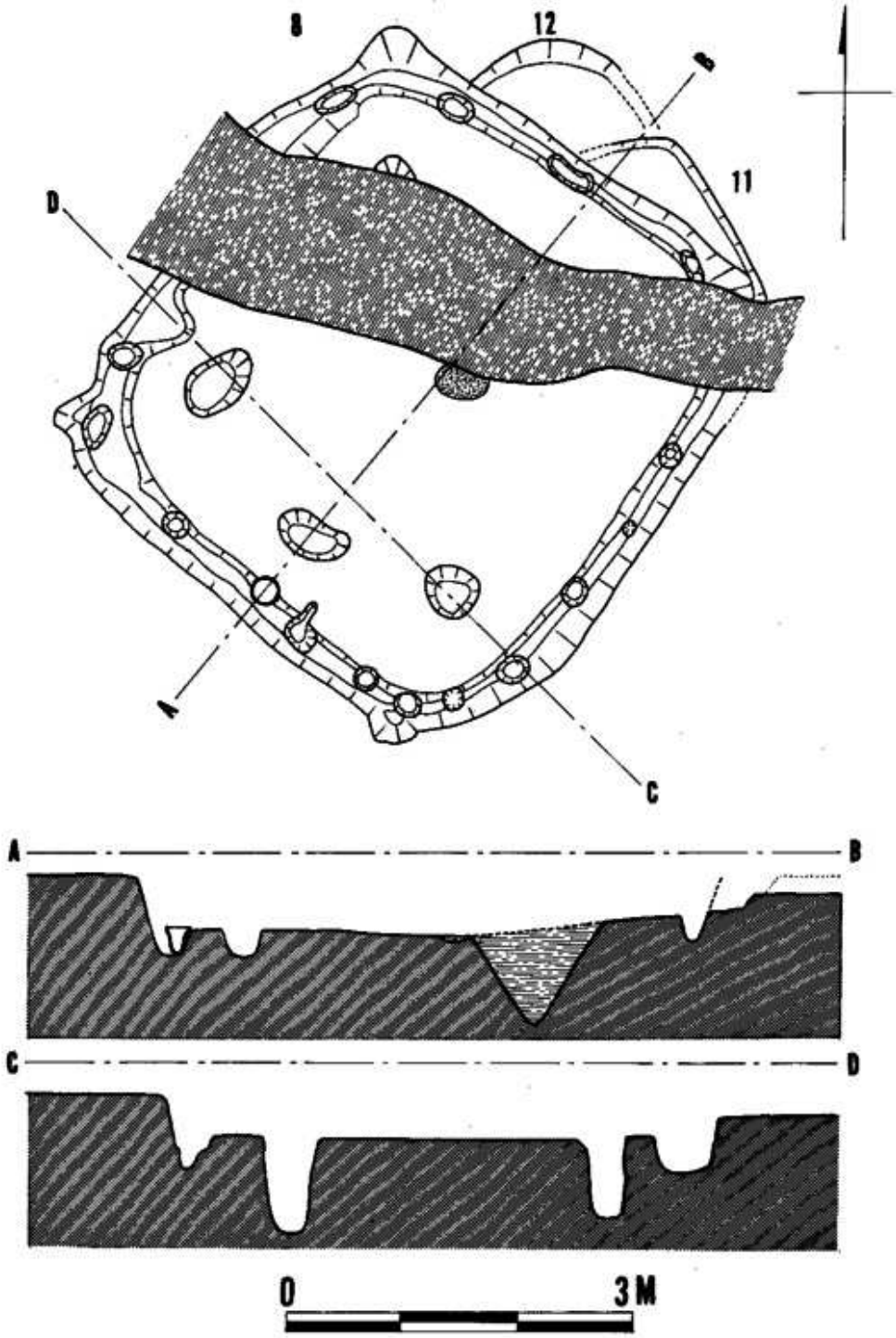
ほかには表土から石斧2，剝片石器1，礫器1が，暗褐色土層から石鏃1（第11図2），石斧3，剝片石器1，鉄製品小破片1（種類不明）が出土した。

(2) 8・11・12号住居址（第2～3図，図版2～4）

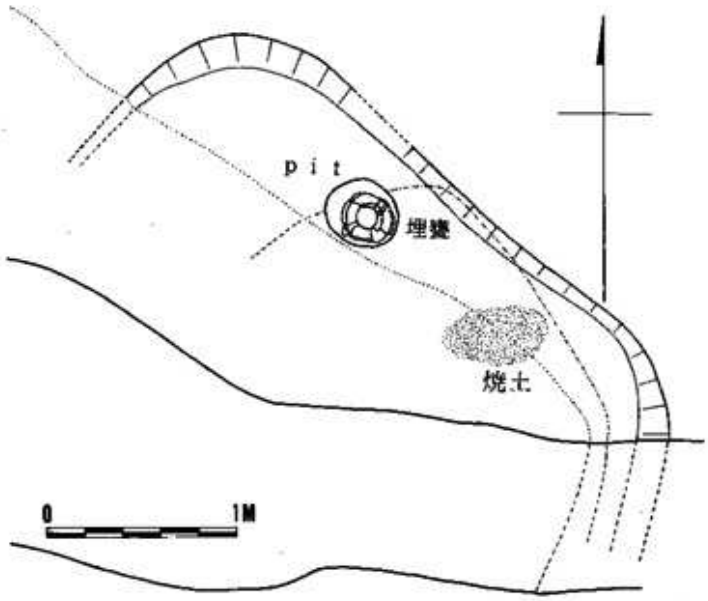
ほぼ同一平面上に重複した加曽利EⅡ期の住居址である。8号住居址の北東側壁付近では重複状態が明瞭に認められ，8号住居址の壁を切って11号住居址が重なり，その上に12号住居址の張床が残っていたが，他の部分では，これらの住居址を横断して設けられた溝状遺構Ⅱその他による攪乱のため，原状は失なわれている。

8号住居址は規模4.9×4.5 m。隅丸方形のプランで，長軸の方向は大体北東――西南に向いている。床面は関東ローム層を掘込んでおり，北東側が高く，地表下70cm。西南側では約15cmほど低い。床面中央北寄りに小型の炉がある。壁の高さは約50cmである。四隅にちいさな突出部があり，幅20～30cm，深さ20～25cmの周溝を伴う。周溝底面には，深さ15～20cmの小穴がほぼ一定の間隔をもって存在する。この小穴は，20個前後あったらしい。なお，壁隅の突出部は，それらと直接関係するものでなく，上屋に伴う構造と考えられる。主柱穴は4個。対象位置にあったと推定され，現存する2個はほとんど垂直にちかい。深さは東側の柱穴が75cm，西側の柱穴が66cmである。

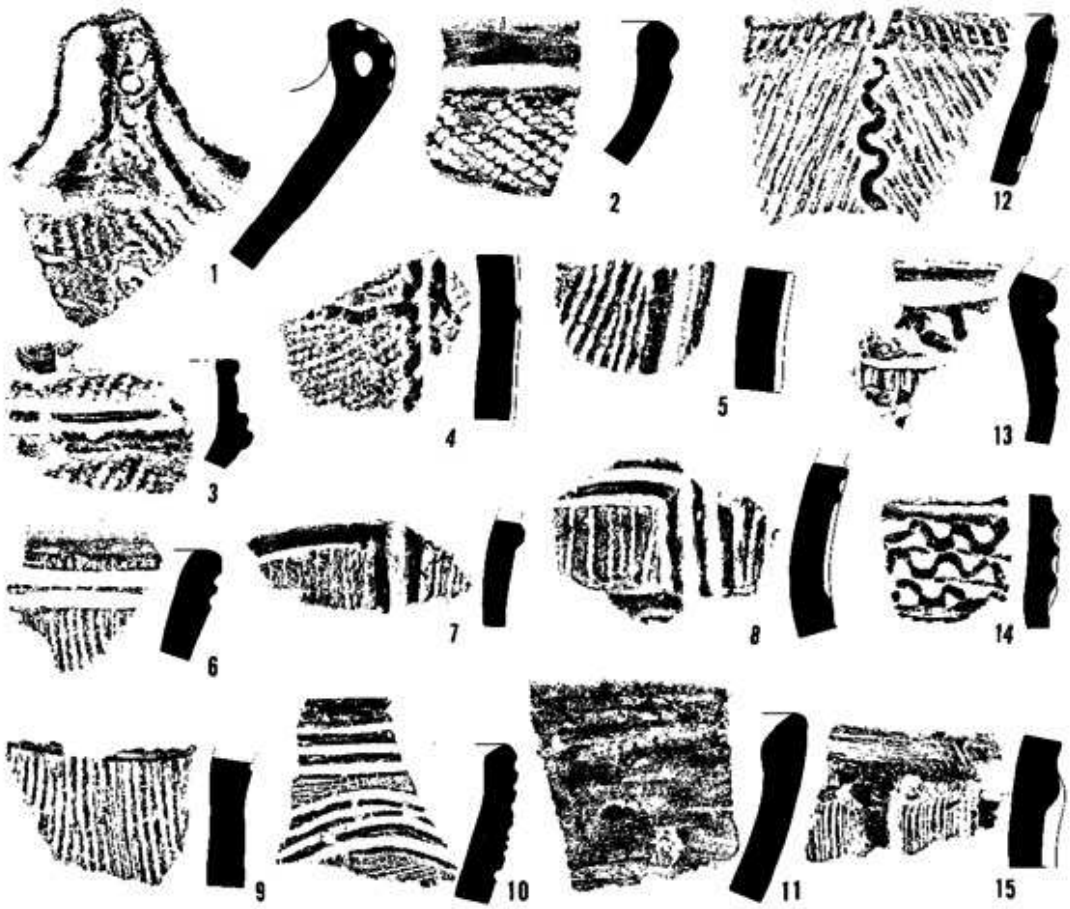
本住居址は，西南側壁面に接する床面末端に，底を欠失した加曽利EⅡ式土器1個を埋設し



第２図　　8号・11号・12号住居址実測図



第３図　12号住居址平面実測図（点線－8号住居址、1点破線＝11号住居址、太線＝溝状遺構2）



第４図　8号住居址出土土器

1・14＝周溝出土　　4・9～11＝覆土下部出土

た埋甕（第12図1，図版3，4）と，それから55cm離れた床面に，平面60×35cm，深さ27cm，底面がたいらな浅い穴があり，いずれも一種の貯蔵施設と考えられる。

床面出土遺物は埋甕のほか，周溝中の小穴から土錘1（第13図），小型局部磨製石斧1（第11図3），周溝中から剥片石器1（第11図6），土器破片（第4図）がある。

覆土の一部は11号，12号住居址に関係すると考えられるが，それらの床面は明確でなかった。ただ，8号住居址の床面から20cm上方に，かなり硬い面があり，床面と認め得るほどの明確な形跡はなかったが，一応この面で覆土を上下に区分した。覆土下部では土錘8（第13図）土器破片の周縁を磨いた円板状土製品1（第11図8）が，覆土上部からは石鏃1（第11図1），石斧2，礫器2，敲石1（第11図5），土錘2（第13図），土器破片（第4図）等が出土した。覆土上部出土遺物の一部は11号，12号住居址に関係するものと思われる。

11号住居址は8号住居址の北東側壁の一部を20cm切っている。壁の付近では床が徐々に高まる。周溝はない。壁は12号住居址により上半分が破壊されている。床面および覆上中には遺物は存在しなかった。

12号住居址は，11号住居址の覆土上に関東ローム土を厚さ3～5cm張って，床を設けている。床面は溝状遺構Ⅱの北側まで認められたが，それ以南では攪乱等により，明瞭でない。残存部も，壁の上半は破壊されている。周溝はない。

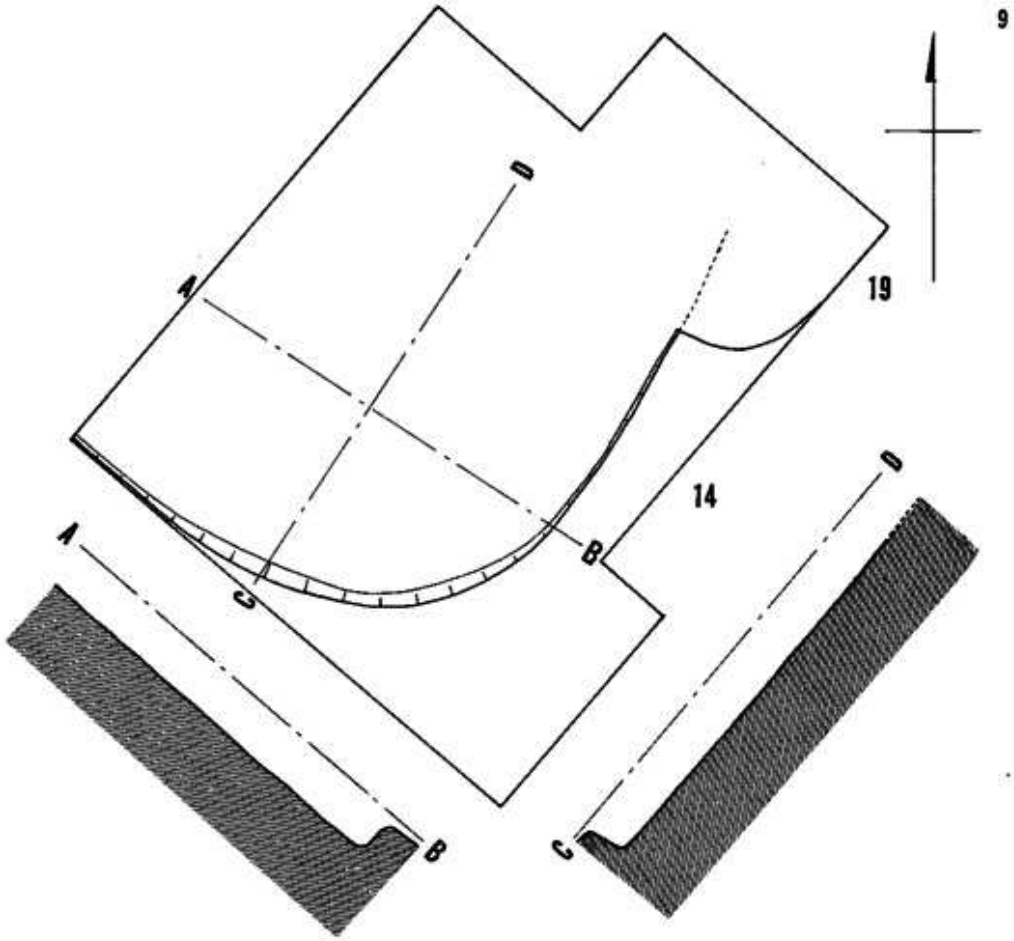
本住居址には，北東側の壁に接して，大木8b式土器の系統をひく鉢形土器1個を埋設した埋甕が存在した（第12図2，図版5）。発掘当時すでに口縁の一部を欠失していたが，埋設後の破損か否かは，明らかでない。なお，埋甕の東南約60cmの位置に，30×55cmの範囲でかつての捨灰と考えられる焼土の散在が認められた。

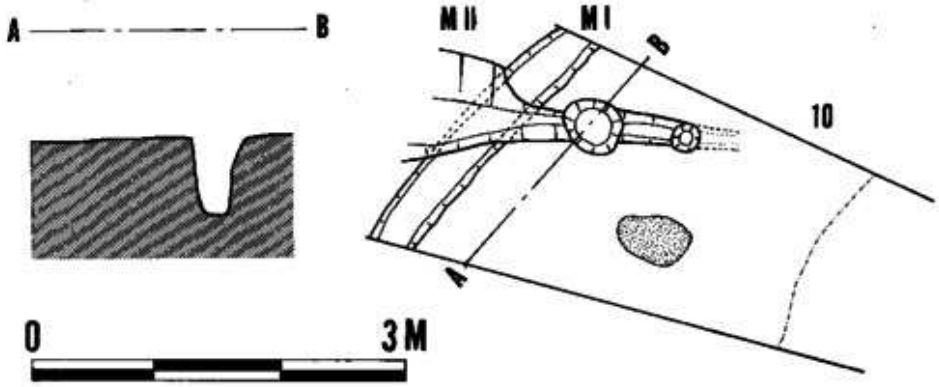
現存部分からは埋甕に使用した鉢形土器以外に遺物は全く出土しなかった。

(3) 溝状遺構Ⅱ（第1図，第6図）

当初はかなりの長さをもつと予想されたが，意外にも，西端はB8とA8の境界付近で終わった。東端はG11で暗褐色土層中に没入し，その付近では暗褐色土層が厚く，遺構の識別が不可能であるため，追跡を断念した。G11の所見では，台地縁辺に向かって，さらに延びることが知られる。確認し得る部分の長さは13mである。

西端のB8付近では平面形，断面形ともU字形となり，底面も弧を描いて上昇するので，全体が丸味をもつ。末端から最も近い位置における幅と深さの最大部分は，1.5mの点にあり，幅2.5m，深さは地表下約70cmである。なお，これが本来の末端であるか，通路状の構造に接





第５図　14号・19号住居址実測図

第６図　10号住居址・溝状遺構1・2(部分)実測図

する部分であるか否かは，住宅にかかるため，確認できなかった。覆土の状態は第1次調査の所見と異ならないが，ただ8号，11号および12号住居址を切る西端付近において，加曽利EⅡ式土器ほか中期土器破片の包含が多い。

東側では10号住居址，溝状遺構Ⅰのため破壊をうけ，遺物の出土もほとんどなかった。

覆土の遺物は，花積下層，勝坂，加曽利EⅠ，加曽利EⅡ，加曽利EⅢ，前野町または五領式土器破片，石斧1，石皿（破片）1等で，すべてB8から出土している。

(4) 10号住居址（第6図）

溝状遺構Ⅰ，Ⅱを追跡中に発見された住居址で，溝状遺構にかかる部分を発掘した。

床面は，地表下75cmにあり，溝状遺構Ⅰの上部を切っている。地山の傾斜のため，図の1点破線の部分までは床面が関東ローム層中にあるが，その東側は不明瞭な張床で，壁は明らかでない。溝状遺構との重複部分も関東ローム上のブロックで薄く床を張っている。西側でも壁は明らかでない。発掘部分の中央に55×40cmの炉がある。焼土の厚さは4cm内外で，きわめて薄い。炉の北側に2個の柱穴が溝状遺構Ⅰと重複しており，左側柱穴は主柱穴の一個と考えられる。右側柱穴も本住居址のものであるが，主柱穴とは考えがたい。深さは2個とも約40cmである。

本住居址は，床面に土師器破片数個（型式不明）が散在したのみで，時期不明である。

(5) 20号住居址

調査区ではⅢ区（A7・A8）になるが，第1区の調査に関連して発見されたので，本項で扱うことにした。

本住居址は攪乱を受け，北側壁が失なわれ，西側は隣接する住宅の下に延びているため，存在を確認するにとどめた。床面は地表下約60cmにあり，関東ローム層の面を固く踏み固めている。

遺物は，床面の凹所に器台2個（第12図7，8。図版8－3，4）が密接した状態で存在したほか，小型壺土形器の下半部1（第12図4）が出土した。器台は2個とも形状が異なっているが，小型壺形土器その他床面出土破片は，すべて前野町式土器の特徴を有するところから，20号住居址は前野町期のものと考えられる。なお，覆土中には，前野町式土器が五領式土器と混在した。いずれも数は少ない。

4. Ⅱ区の遺構と遺物

(1) 表土および暗褐色土層

層序は，今回の発掘部分でも第1次調査の所見と特に異なる点はなく，表土（耕作土）30cm前後，暗褐色土層20～30cm，ローム質の黄褐色土層15～20cmを経て関東ローム層へ移行する。暗褐色土層は台地縁辺側で厚くなり，G21北東セクションにおいては約50cm堆積していた。

9号，13号，18号住居址付近の暗褐色土層下部から遺構覆土の上部にかけて，薄い焼土の散乱や床面と思われる硬い面が断続的に存在し，G18北半部からは，前野町期の鉢形土器1個（第12図6，図版8－1）が破砕した状態で出土したが，遺構の重複と耕作による攪乱が激しく，住居址として把えることが不可能であった。

遺物は，F～G・8～21（9・13・18号住居址部分）に多い。花積下層，勝坂，加曽利EⅠ加曽利EⅡ，宮の台，弥生町，前野町，五領の各型式土器の破片が認められ，前野町式，五領式が大部分を占める。表上から石斧2，剥片石器1，土錘1が，暗褐色土層からは，石斧8，磨石2，敲石1，剥片石器2，礫器3および扁平片刃石斧1（第11図4）等が出土した。

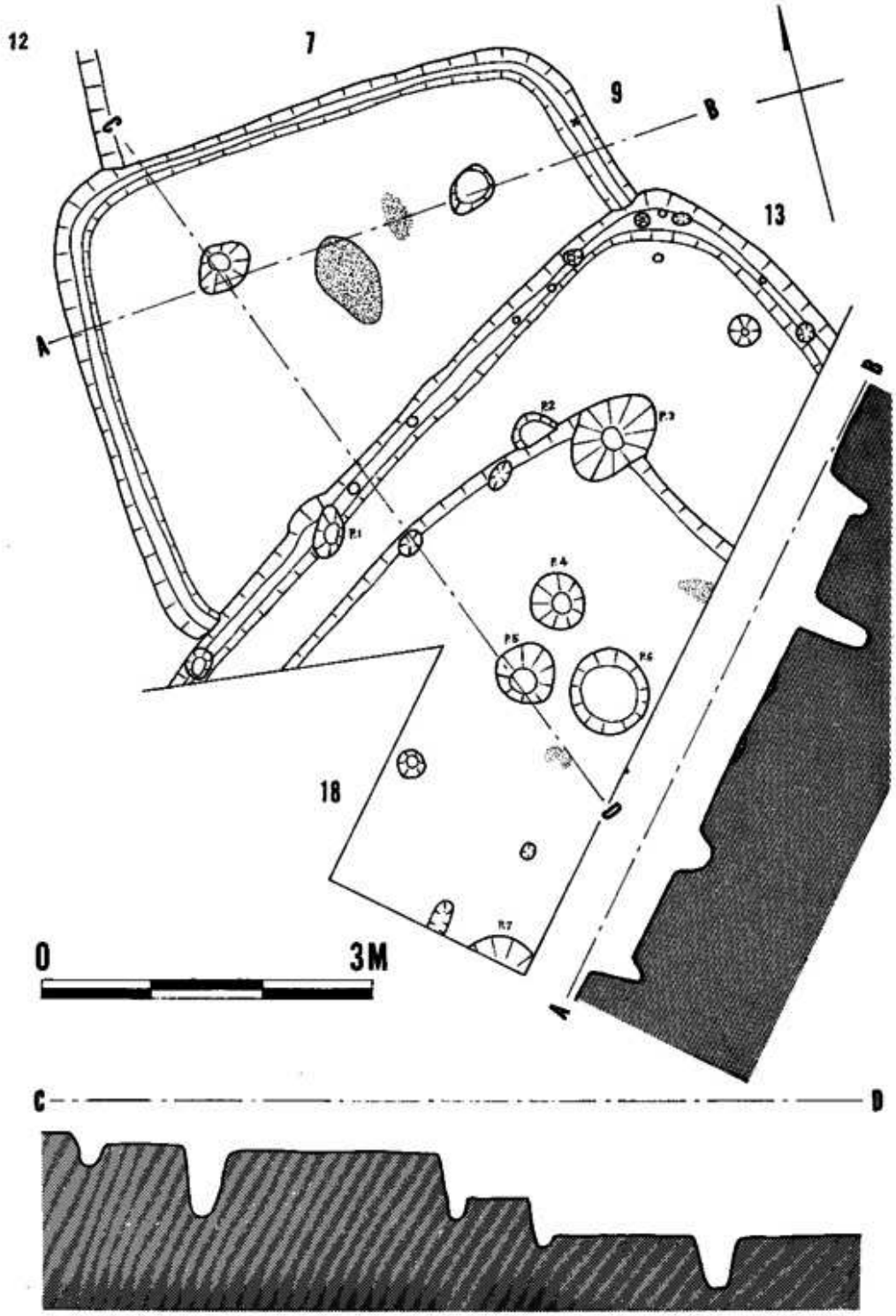
A～C・15～17（14・19号住居址部分）では遺物が少なく，花積下層，加曽利EⅠ，加曽利EⅡ，堀ノ内Ⅰ(？)，宮の台，久ケ原の諸型式の土器破片が散慢に存在し，表上から石斧1，暗褐色土層からは石斧1，剥片石器1の出土をみたにすぎない。

(2) 9・13・18号住居址（第7図，図版6）

これらの住居址は，第1次調査で発見した7号住居址を含めて，4個が南北方向に僅かずつずれて重複する。各住居址の時期と切合い状態から，前後関係は18号（縄文前期または中期？）⟶13号（弥生町期）⟶9号（五領期）⟶7号（五領期）の順となり，重複部分の床は張床となっている。

9号住居址は規模約5×4.5m。方形のプランを呈するが，東側の隅がやや張り出している。床面は地表下72cmにある。関東ローム層を掘込み，13号住居址との重複部分では関東ローム土の小塊を厚さ5cm前後に敷いた張床である。壁の高さ45cm。壁に沿って幅15～20cm，深さ15cm前後の周溝を伴う。炉は北に偏している。規模55×90cm，焼土は厚さ12cmである。炉の東30cmの位置では，25×45cmの範囲に，焼土（捨灰）が認められた。主柱穴は対象位置に4個あり，深さはいずれも60～65cmである。

遺物は床面から五領式土器の小破片と鉄鏃茎部破片1（第11図9），東側ピット中にベンガ



第7図　9号・13号・18号住居址実測図

P.1　P.1, P.2=9号住居址柱穴　P.3, R.7=13住居址柱穴　P.4, P.5, P.6=所属不明柱穴

×＝鉄製品出土位置(9号住居址東側周溝中)

ラ粉末少量，周溝中から鎌と考えられる鉄製品破片1——現状8×3.3×0.4cm。刃がわずかに内彎する——（第11図10）が出土した。覆土中の遺物は五領式土器の破片が大部分を占める。なお，縄文時代中期の特徴的形態を示す石鏃1（第11図1）が混入していた。

13号住居址は発掘部分の形状から，プランは方形または長方形と推定される。本住居址で注意すべき点は，北西側の辺が少なくとも6.5m以上に達することで，弥生町期の住居址でも，比較的大型のものと言えよう。床面は地表下1.1mにあり，13号住居址よりも約35cm低い。18号住居址に重複する部分では，関東ローム土を厚さ10cm前後に敷き固めて，張床にしている。G18・19では，直径2m，深さ地表下1.5mに達するすり鉢形の攪乱（最近のもの）にかかるため，破損している。壁は高さ35～40cmで，周溝を伴う。周溝は幅15～20cm，深さ10～20cmで，溝底に小穴が存在するが，配置は明らかでない。発掘した範囲には炉は認められず，柱穴も確認できたのは，実測図中，P3，P7の2個だけである。

住居址内の遺物は北隅の床面に密着していた遊形七器口縁部の大型破片ほか数個の土器破片にすぎない。覆土中からは，北半部において，花積下層，勝坂，加曽利EⅠ，加曽利EⅡ，弥生町の諸型式の土器破片が少量出土し，南半部では覆土上部に前野町式土器の破片が目立った。南半部には，前野町式土器が出土するレベルに，断続的な床面が存在する。18号住居址床面の柱穴のうち，比較的浅いP6（深さ25cm）等は，この住居址と関係するもののように考えられる。

18号住居址も，床面と壁の一部を確認しただけであるので，規模は明らかでないがプランは長方形または方形らしい。床面は地表下1.4mの深さにある。壁の上端は13号住居址に破壊されている。現状における壁の高さは30cmで，周溝はみられない。ただ，深さ20cmの小穴が壁に接して2個ある。柱穴はP4が本住居址のものと考えられる以外は不明である。

床面には遺物は存在せず，直上から花積下層式上器と勝坂式土器の破片が少数出土しただけであり，時期を判定しがたい。覆土中には13号住居址覆土中にみられた諸型式の土器破片が出土したが，下半部では勝坂式土器と花積下層式上器に限られている。ほかには土錘1が出土した。

(3) 14・19号住居址 （第5図）

地表面に花積下層式土器の破片がやや多く散布し，ボーリングの結果，竪穴の存在が知られたので試掘したところ，14号住居址と19号住居址が重複して現われた。14号は宮の台期，19号は久ケ原期または弥生町期の住居址であったので，とりあえず存在と時期を確認するにとどめ発掘を差し控えた。遺物は土器破片がごく少数出土しただけで，特記すべき点はない。

5. Ⅲ区・Ⅵ区の遺構と遺物

(1) 表土および暗褐色土層

Ⅲ区およびⅥ区の調査は溝状遺構Ⅰの規模を把握する目的で行なったので，一括して扱うことにする。

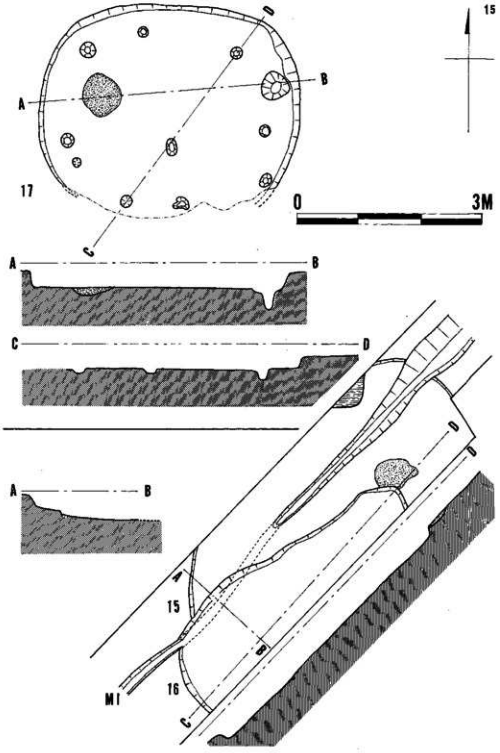
発掘区は，そのため必然的に台地先端に向かって，帯状に延びた。上層の状態は，地点により多少の差はあるが，表土（耕作土）30cm前後，暗褐色土層25～35cm，ローム質黄褐色土層15～20cm，関東ローム層の層序を示し，他区と基本的な差はない。ただ，暗褐色土層は台地先端の傾斜部にかかると相当に厚く堆積しており，17号住居址付近では40～60cmに達する。

表土および暗褐色土層中における遺物の包含は，きわめて少なく，15号，16号住居址と17号住居址付近以外では，ほとんど出土しなかった。Ⅲ区からは花積下層，勝坂，阿玉台，加曽利EⅠ加曽利EⅡの諸型式の土器破片が出土したが，特に勝坂式土器と加曽利EⅠ式土器が多い。Ⅵ区17号住居址の部分には，花積下層，勝坂，弥生町の諸型式土器が認められた。発掘区内に遺構は発見されなかったけれども，勝坂式土器が多かったことが注意される。なおⅢ区表土からは礫器1が出土した。

(2) 溝状遺構Ⅰ（第1図，第9図，図版7－3，4）

第1次調査およびⅢ区，Ⅵ区を発掘した結果，本遺構は台地の東南側縁辺に並行して幾分蛇行しながら，ほぼ北東―西南方向に延びていることが判明した。両端が破壊されているため全体の規模は把握できない。現存部は長さ約40mである。第1次調査で発掘した個所では，保存が良く，断面もかなり明瞭な「レの字形」を呈したが，Ⅲ区においては15号，16号住居址覆土にかかり，またF3より先では暗褐色土層の堆積が厚くなるため，ほとんど暗褐色土層中に没入し，関東ローム層上端からローム質黄褐色土層にかけて底部を残す（幅20～30cm，深さ15～25cm）状態であった。したがって，本遺構を特徴づける溝底および斜面の小穴はⅠ区に6個，やや疑わしいものを加えても10個前後認められたにすぎず，Ⅵ区では確認困難であった。小穴の存在は把えられなかったが，遺構の延長は明瞭にたどれた。現存部分でさえ延長約40mをはかり，おそらく柵を伴った防護施設で，台地縁辺寄りに延びているところから，集落の外側に設けられたものと考えられよう。

時期は，台地先端付近で弥生町期の17号住居址に破壊されているので，弥生町期以前，おそらく宮の台期または久ケ原期と推定できる。なお，本遺構に関係する遺物は出土しなかった。



第8図　17号住居址実測図

第9図　15・16号住居址・溝状遺構1(部分)実測図

(3) 15・16号住居址 （第9図，図版7－3，4）

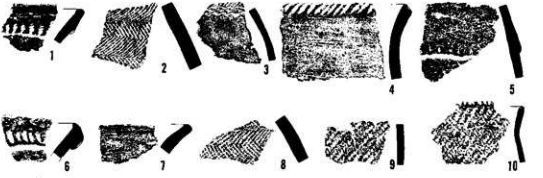
溝状遺構Ⅰを調査中に存在が知られた住居址で，15号は確認できなかったが勝坂期と考えられ，16号は加曽利EⅠ期に属し，重複している。これらについては，溝状遺構Ⅰの規模把握の目的に従って，発掘区にかかる部分だけを調査することにとめた。

15号住居址は4号，5号，16号住居址および溝状遺構Ⅰ等により，かなり破壊をうけている。現状においては規模，プランとも推定しがたい。床面は壁の周辺が幾分高く，皿状を呈し，深さは床面中央付近で地表下68cmをはかる。壁は高さ25cm。周溝はない。北東壁寄りに65×55cmの炉を設けており，焼土の厚さは12cmである。

床面に密着した遺物はなかったが，床面直上から覆土下半に勝坂式土器の破片のみが出土し上半部でも阿玉台，加曽利EⅠ，加曽利EⅡ式等の破片が僅か混在する状態からみて，本住居址の時期は勝坂期の可能性が多い。

16号住居址も現状では規模，プランの推定は困難である。床面は地表下83cmにあり，関東ローム層を掘込んで固く踏み固めている。周溝はない。発掘した範囲に炉は発見されなかった。本住居址の南西隅では，壁に接する位置に，加曽利EⅠ式鉢形土器の胴部大型破片1個が埋設されたような状態で存在した。ちょうど溝状遺構Ⅰの底にかかるため，破壊を受けたものらしく，位置からみても埋甕であったと考えられる。

遺物は床面に密着して加曽利EⅠ式土器の破片と剝片石器1（第11図7）が，覆土からは加曽利EⅠ式および勝坂式土器破片，石斧1，土錘1（第13図）が出土した。出土量は少ない。



第10図　第17号住居址出土土器　（約1／2.5）
1～5＝床面出土．　6～10＝覆土出土

(4) 17号住居址（第8図，図版7－1，2）

扁円形のプランをもつ弥生町期の住居址で，南側壁と床面の一部が破壊されているが，原状を比較的よく遺し，規模約4.2×3.4 m，長軸は東――西方向と一致する。同期の住居址としては，かなり小型である。床面は（北東側で）地表下50cmにある。北半分は関東ローム層を掘込んでいるが，南側では地山の傾斜に伴い暗褐色土層が厚くなるため，この上に床を張っており，床面が全体に軟弱である。壁は原状を残す北東側において，高さ30～35cmをはかる。周溝はない。柱穴は現状で11個存在するが，東端の1個（直径45cm，深さ37cm）をのぞき，いずれも極端にちいさく，深さも15～25cmにすぎない。それらが大体，壁沿いに設けられている点も同期の一般的な住居址の場合と多分に異なる。住居の規模によるものと考えられよう。炉は西側壁にちかく位置を占め，平面60×60cm，焼土の厚さは13cmであった。

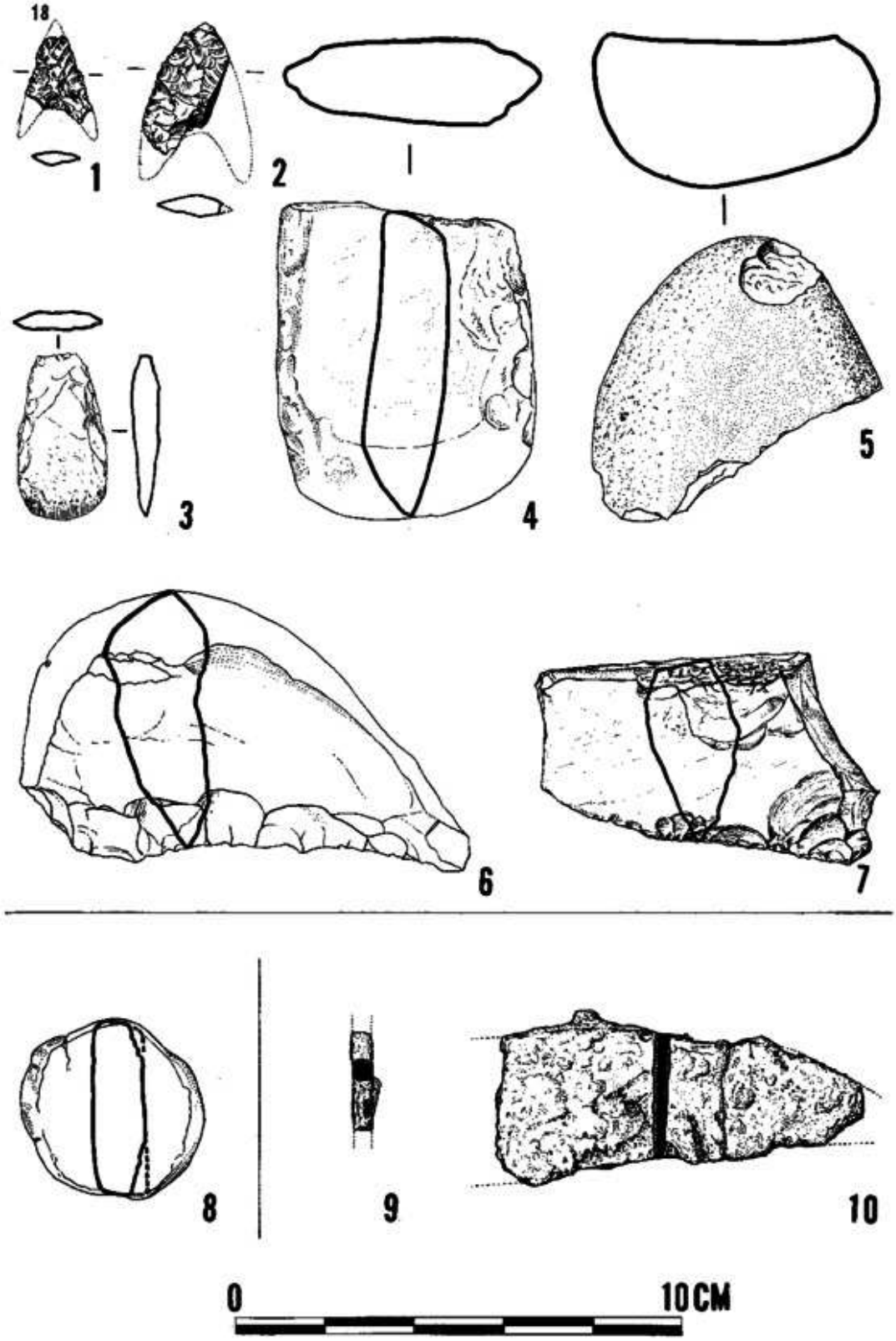
遺物は床面から広口の小型壺形土器（第12図5），鉢形土器胴部破片（第12図3）ほか土器破片10数個（第10図1～5）が出土した。小型壺形土器以外は，すべて弥生町式土器である。なお小型壺形土器は北関東地方の後期弥生式土器の系統をひく異質の土器で，おそらく模倣品と考えられる注意すべき資料である。覆土では，下半部から弥生町式土器の破片が主に出土し（第10図6～10），上半部では，これに勝坂式土器の破片が混在したにすぎない。

6. 結　　び

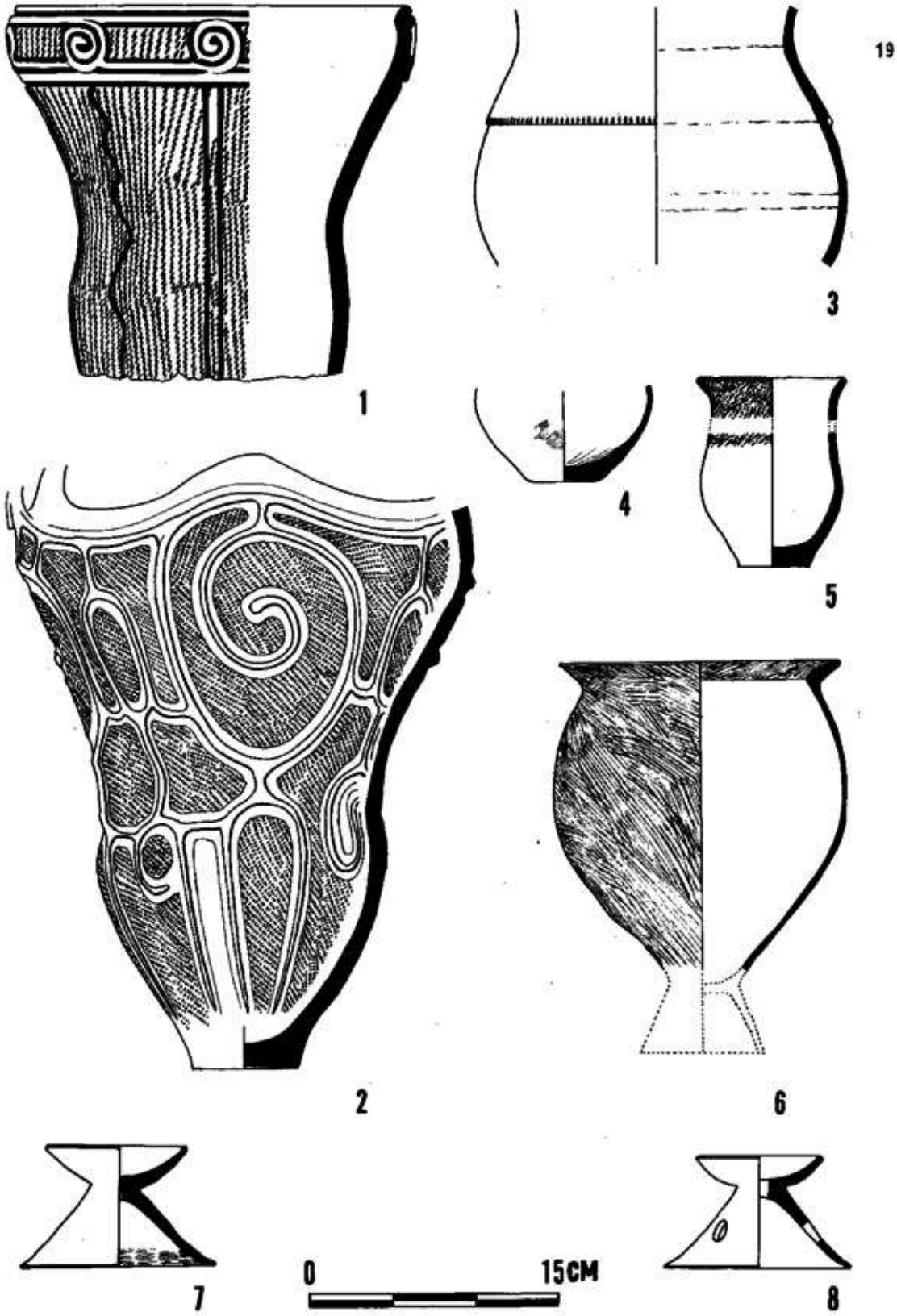
今回の調査においては，主目的のひとつであった花積下層期の住居址は把えられなかったがその他はある程度，目的を達することができた。

そのうち，柵状の構造を伴う構状遺構Ⅰについては，長さ40m以上に達することが判明し，位置，走向において，集落に付属した一種の防護施設とみてほぼ誤りないと考えられるに至った。ただし，溝状遺構Ⅱとは性格が多少異なるもののようである。8号住居址とE18～21付近の落込部分では，それぞれ住居址の存在が確認できた。住居の付属施設では8号住居址の貯蔵穴と思われる小ピットの存在，12号住居址で大木8b式系の土器を埋甕に使用している点等が注意され，後者は17号住居址の小型壺形土器とともに他地域との関係を示す良い資料である。

一方，調査中新たに知られた住居址の一部は，日程その他の事情でやむを得ず調査を保留したが，いずれ改めて調査したい。また，本遺跡についての考察，遺構・遺物の細部について説明を要する点が多いが，それらは，おって研究報告その他で扱うことにした。

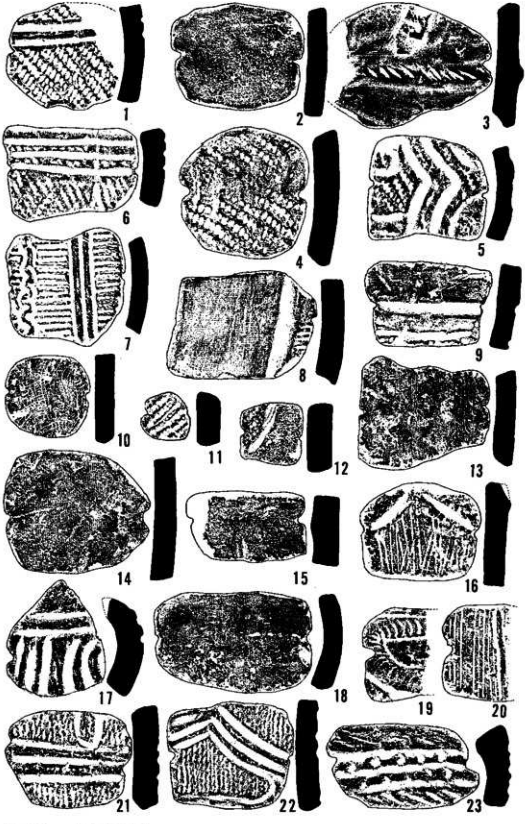


第11図　　石器・土製品・鉄器実測図



第12図　土器実測図　1＝8号住居址出土(埋甕)　2＝12号住居址出土(埋甕)　3・5＝17号住居址床面出土

4・7・8＝20号住居址床面出土



第１３図　土錘実測図

13＝溝状遺構2出土、　2～5・7・8・12＝２区暗褐色上層出土　6・10・14＝8号住居址覆土上部出土

11・19～21・23＝8号住居址覆土下部出土　16・17・22＝8号住居址出土。　15＝３区暗褐色上層出土

（付録） 梶山貝塚出土の脊椎動物遺存体

遺存体の種名

脊椎動物門 *Phylum Vertebrate*

魚 綱 *Class Pisces*

1 板鰓亜綱（サメ類） *Elasmobranchi*
2 ドチザメ？ *Triakis scyllia omüller et Henle*
3 ハ モ *Muraenesox cinereus (Forskål)*
4 マボラ *Mugil ce phalus Linné*
5 スズキ *Lateolabrax Japonicus (Cuvier et Valenciennes)*
6 クロダイ *Mylio macrocephalus (Basilewsky)*
7 マダイ *Chrysophrys major Temminck et Schlegel*
8 コ チ *Platycephalus indicus (Linné)*
9 カレイ亜目 *Pleuronectina*

哺乳綱 *Class Mammalia*

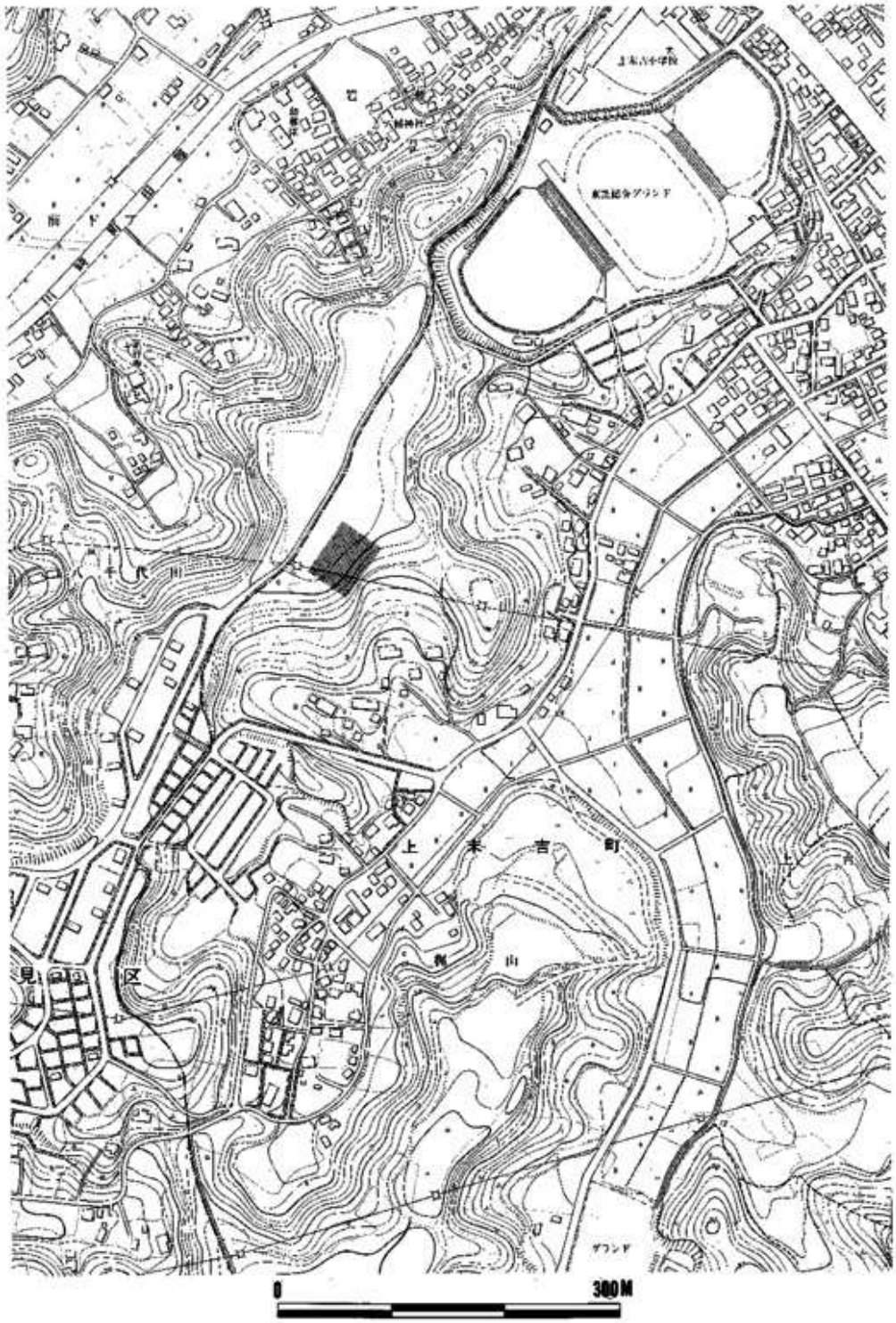
1 イノシシ *Sus scrofa leucomystax Temminck*
2 ニホンジカ *Cervus nippon nippon Temminck*
3 ニホンイヌ *Canis familiaris var. Japonicus Temminck*
4 ホンドテン *Martes melampus melampus Wagner*

1967年12月における梶山貝塚発掘調査の際出土した脊椎動物の遺骸は，小型のミカン箱一個分程の量であり，確認出来たのは，ドチザメ，サメ類，ハモ，ボラ，スズキ，クロダイ，マダイ，コチ，カレイ類等魚類9種，イノシシ，ニホンジカ，テン，ニホンイヌの哺乳類4種，計13種で，鳥骨は満足なものをみることは出来なかった。

サメ類は3個の椎骨を得たのみであった。ハモは最も多く出土し，またその骨片15個のうち額骨が9個を占めた。スズキは歯骨が出土している。現生のものと比べると，体長は45cm前後あったと思われる。クロダイ，マダイの出土も多い。体長は（推定値で）大きい例では60cmほどにも達するものが出土している。しかしながら，縄文貝塚出土のタイ類では，珍しいことではない。

哺乳類は4種のみであった。イノシシとニホンジカが主体で，量的には両種あまり差がなかった。ニホンジカでは，小片ではあるが鹿角片が目立った。犬は，小型犬と思われるものの断片が10数片出土している。

ところで，この梶山貝塚を中心として，この東京湾湾口部に近い横浜市付近には，これまでに知られた縄文前期貝塚がかなりある。しかし，それら貝塚出土の自然遺物関係の資料研究は，今日に至るも決して充分なものではない。豊富な遺物の出土がありながら，報告されていなかったり，あるいはその機会を逸しているものもある。梶山貝塚で出土した自然遺物の脊椎動物遺存体は，決して量的に多いものではないし，その種類も少ないけれども，それらがどのような形質や比率において出土したかということを，まとめることは出来た。（野谷由美）



遺跡付近地形図

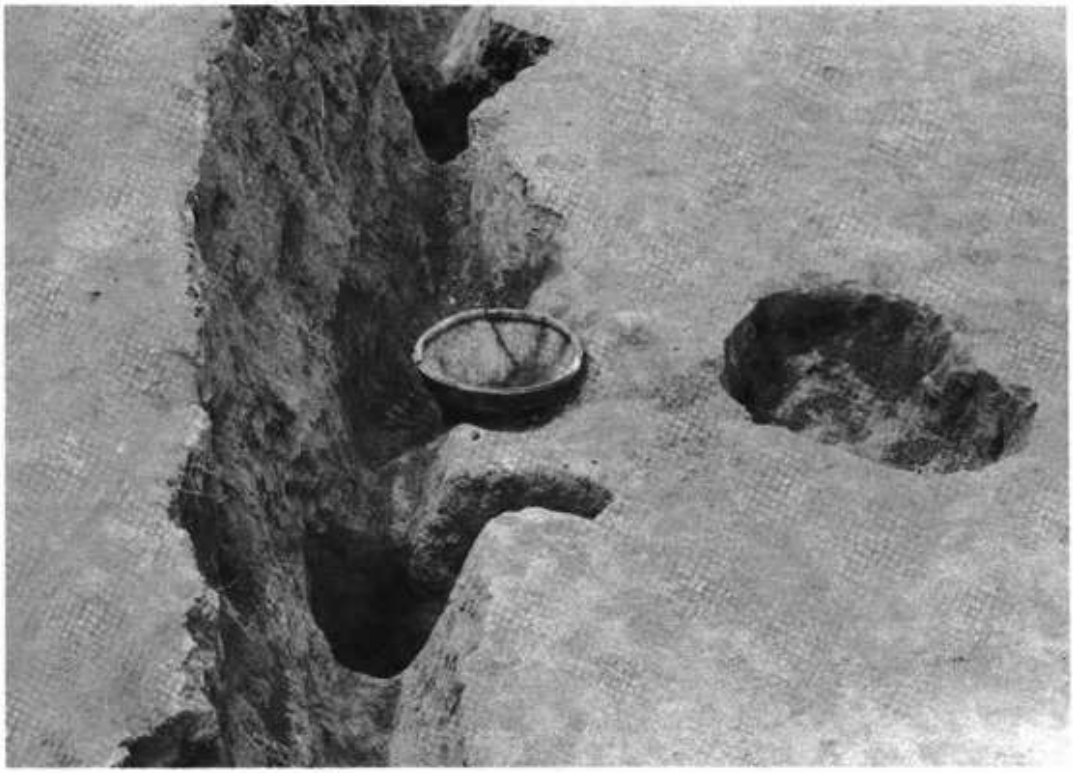
1 遺跡遠景

2 発掘状況

1　8号住居址

2　8・11・12号住居址重複状態

8号住居址埋甕



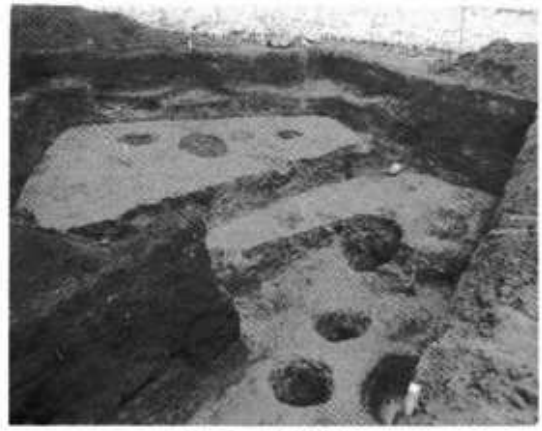
2　8号住居址埋甕および貯蔵穴

1　12号住居址埋甕

2　12号住居址埋甕埋設状態

1 号 9住 居 址

2 13・18号住居址



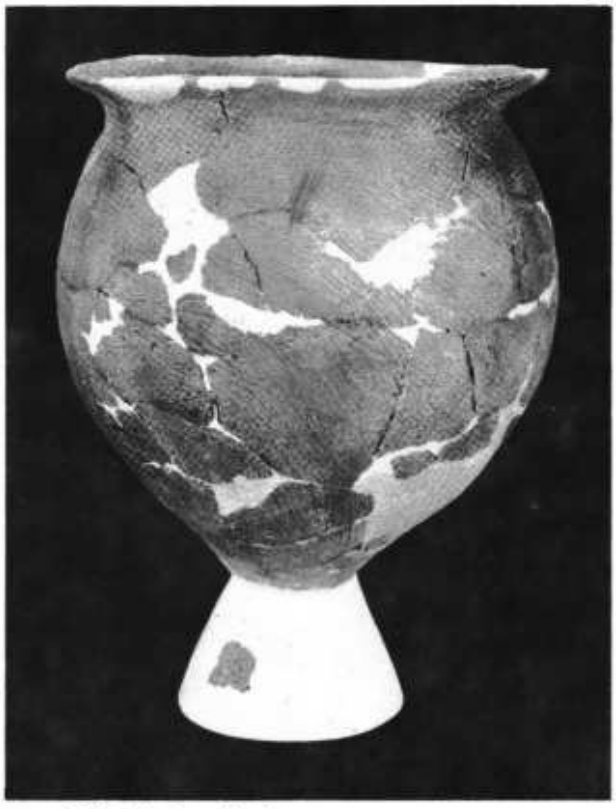
3 9・13・18号住居址重複状態

1 17号住居址

2 17号住居址土器出土状態

3 15・16号住居址

4 溝状遺構 I

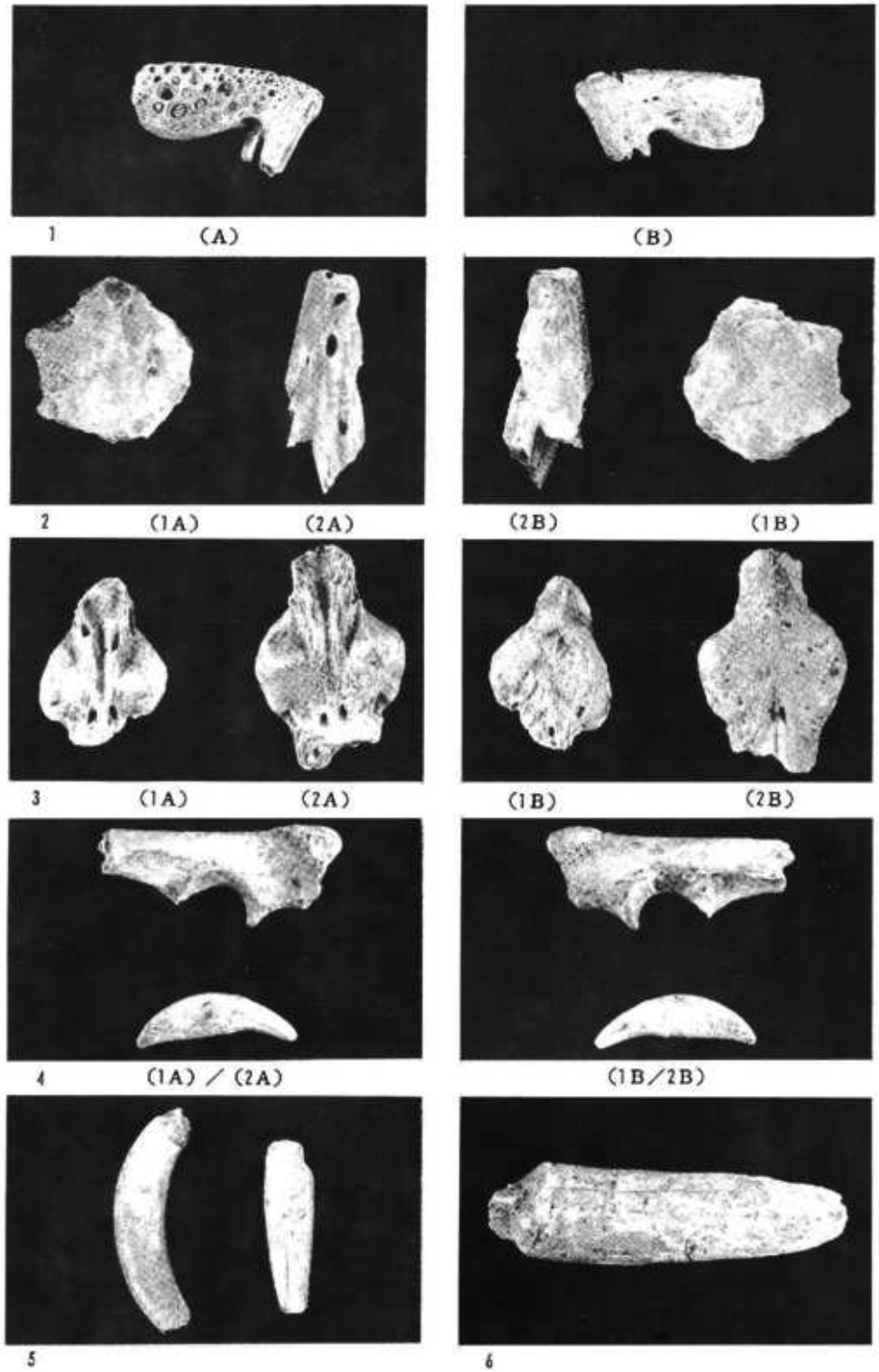


1　鉢形土器（G18出土）

3　器　台（20号住居址）

4　器　台（20号住居址）

2　鉢形土器（17号住居址）



梶山貝塚出土の自然遺物（魚類・獣類）

1 ＝ クロダイ　　2 ＝ スズキ　　3 ＝ ハ　モ

4 ＝ イ　ヌ　　5 ＝ イノシシ　　6 ＝ シ　カ（切断角）

昭和45年3月20日 印刷
昭和45年3月31日 発行

編集者兼発行者
神奈川県立博物館
斎藤太次郎
神奈川県横浜市中区南仲通5-60

印刷所 東邦印刷株式会社